

「共に住む言」

～この方が神を示されたのである～

ヨハネによる福音書 1章 14～18節 讃美歌 96、275

14 言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。15 ヨハネは、この方について証しをし、声を張り上げて言った。「『わたしの後から来られる方は、わたしより優れている。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。」16 わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。17 律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。18 いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。

出エジプト記 33章 18～20節

18 モーセが、「どうか、あなたの栄光をお示してください」と言うと、19 主は言われた。「わたしはあなたの前にすべてのわたしの善い賜物を通らせ、あなたの前に主という名を宣言する。わたしは恵もうとする者を恵み、憐れもうとする者を憐れむ。」20 また言われた。「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである。」21 更に、主は言われた。「見よ、一つの場所がわたしの傍らにある。あなたはその岩のそばに立ちなさい。22 わが栄光が通り過ぎるとき、わたしはあなたをその岩の裂け目に入れ、わたしが通り過ぎるまで、わたしの手であなたを覆う。23 わたしが手を離すとき、あなたはわたしの後ろを見るが、わたしの顔は見えない。」

■ 本論

ヨハネによる福音書の冒頭に置かれました序文、プロローグとも言うべき箇所を読み進めています。

このところは、使徒ヨハネに連なる教会でうたわれていた讃美歌がもとになったものであろう、そのように私たちもこの箇所を読み、また味わってきたのです。

今日は、その三番・三節とも呼ぶべき箇所です。

言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。

そのように歌い始められています。

が、すぐにわたしたちの口は止まります。目は止まります。

明らかに歌の調子ではないという思われる箇所が置かれているからです。

15節. ヨハネは、この方について証しをし、声を張り上げて言った。

ギリシア語を見ますと、ここの 15 節だけが散文調、すなわち、ふつうの文章を記すような言葉遣いがなされています。他のところは韻文調、すなわち詩的な表現、まさに歌の言葉遣いがなされていますので、ここだけが浮かび上がってくるんです。

内容を見てもそうです。

言は肉となって、わたしたちの間に宿られたと歌い始められて、そのまま 15 節を飛ばして、16 節、わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けたというところに繋げた方が意味は通りやすい。読みやすい。

この点においても、15 節は浮いている。

どうやら、この 15 節は、もともと教会で歌われていた讃美歌に付け加えられた部

分であろうと、この福音書を書いた人が挿入した部分であるらしいんですね。

そこで、この 15 節を飛ばして読むなんて試みがなされたこともあるんですけども、わたしは逆だと思います。むしろ、この 15 節が大切なんだろうと思います。

わざわざ入れた。しかも、わざわざ入れたと分かるかたちで入れている。

詩的な表現に、歌の言葉遣いにしていないんです。そのまま入れた。

その福音書記者への思いに、まず私たちの心向けたいのです。

ヨハネです、洗礼者ヨハネに、この福音書記者は強いこだわりを向けています。

正確には、洗礼者ヨハネの証しについて、です。

既に、この歌の二番とも言うべき 6 節から 8 節にもヨハネの証しについての言及がありました。6 神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。7 彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。8 彼は光ではなく、光について証しをするために来た。

実はここも散文調で記されていて、後から差し込んだ箇所かもしれない。

とにかく、この福音書記者は、洗礼者ヨハネの証しに注目しているんです。

それは、この福音書を読み進めていくなかで、事あるごとに、わたしたちが出会っていくことになる、この福音書の特徴の一つです。

が、前もって、今日、二つの箇所だけをあらかじめ見ておきましょう。

一つは、5 章 31 節からのところ。

小見出しに「イエスについての証し」と記されているところ。

その 33 節に、イエス様のこういう言葉が記されています。

あなたたちはヨハネのもとへ人を送ったが、彼は真理について証しをした。

やっぱり、洗礼者ヨハネは証し人であると言われている。

が、その直後にこう言われる。34 節。わたしは、人間による証しは受けない。

人間から、あなたは神の子であると、永遠なるロゴスであるという、そういう証は受けない。人間から証明してもらう必要はないと、イエス様は言われる。

37 節、わたしをお遣わしになった父が、わたしについて証しをしてくださる。

父なる神だけが、神の子としてのわたしの存在を証明してくれるのだと言われる。

そうしますと、ヨハネは人間です。神ではない。神から遣わされた一人の人間です。

そのヨハネが、真理について、すなわちイエス様について証をしたと言われる。

それでいて、イエス様は、人間による証しは受けないと言われる。

お分かりになるでしょうか。まるで一休さんとのとんち比べのようなお話です。

どういうことであるのか。今日はもう結論だけを見ておきましょう。

5 章 39 節のところ、イエス様はこう言われています。

聖書はわたしについて証しをするものだ。

すなわち、ヨハネが証し人であると言われるのは、彼が聖書を語ったからだということです。自分の言葉ではない。神の言葉を、聖書を語ったからだ。

イエス様は、人間による証しは受けない。人間の願望を叶えてくれる、希望を叶えてくれる、そうして神の子と証明される、讃えられる、そういう証は受けない。

イエスが神の子である、永遠なるロゴスである、それを証明するのは神の言葉だけであると、ヨハネはその神の言葉を語った人物であると、そういうことをイエス様は

言われているようなんですね。

なるほど、今日お読みしたところの1章15節に、ヨハネは、この方について証しをし、声を張り上げて言ったとありました。

「声を張り上げて言った」。大声で叫んだ。

それは、旧約の預言者たちが、神の言葉を語る際になしていたことです。

この世に宣言を下す、この世界に神の御旨をとどろかせる。

そのあらわれとして、預言者たちは、声を張り上げて言った、のでした。

その同じ姿をヨハネもとっている。

すなわち、ヨハネは神の言葉を語ったということです。

その姿が、教会にとって大切でありましたのは、その神の言葉を語る、イエス様をキリストと証しする、そのバトンが、教会に手渡されたからです。

15章26節。それもイエス様の言葉です。イエス様御自身が言われたこと。

26 わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである。やはり、イエス様が神の子であるという証明をなさる父である神だけでして、その神から送られる真理の霊、聖霊だけであるということが繰り返される。

とにもかくにも、イエスが神の子であるということを証明するのは、父なる神だけであるし、その御心が記された聖書だけであるし、父なる神から出る聖霊なる神だけである。それが、ずっとイエス様の言われていることです。

しかし、そこで、27節、こう言われている。

27 あなたがたも、初めからわたしと一緒にいたのだから、証しをするのである。

イエス様は人間からの証しは受けられない。

が、わたしと一緒にいるあなたがたは、証しをする。

先ほどのとんち比べと同じです。

導き出される答えは、弟子たちは、そして教会は、父なる神からの聖霊を受ける、聖書を読む、旧約聖書から新約聖書そのすべての中に、どこの箇所にもイエス様を見つけていく。ヨハネからのバトンを受け取る。

そこに、教会は立ち現れる、そういう思いがこの福音書にはある。

ですから、歌のなかに挟み込んだのです。

ヨハネの姿を、その姿に重ねるように自分たちの姿を。

ヨハネは、そしてわたしたちもこの方について証しをし、声を張り上げて言った。

この讚美歌は、そのようにしてうたわれる歌です。

神に呼び集められた者たちが、聖霊に促されるようにして、神をほめたたえる。

自分の願望や希望はとりあえず脇に置いて、まず神を想う。神を想う。

それこそ、ヨハネに連なる教会が経験していた礼拝です。

イエス様は、人間からの証しは受けられない。

だから、ここに聖霊が満ちてほしい、ここに神の栄光が満ちてほしい。

その時、礼拝は礼拝となる。それが、神の礼拝だと。

そういうように礼拝を献げさせてほしい。そのように、最初期のキリスト教会は歌

った。歌い続けて来た。今日、わたしたちもうたう歌です。

言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。

「初めに言があった」という永遠なるロゴス、この世界を造られた神である言。その方が肉となって、すなわち、人間となって、「わたしたちの間に宿られた」。ここから「受肉」という言葉が生まれる。神が人の肉をとられた。人となられた。しかも、ただ人と、となれたというのではない。「わたしたちの間に宿られた」。そこに、住んでくださった。「宿られた」という言葉は、天幕を張った、幕屋を張った、テントを張ったという単語が使われています。旅の宿です。

ペトロの手紙二を読みました時に、「仮の宿」という表現がでてきましたけれども、もとは同じ単語です。幕屋・テントを張った。

神なる言が、テントを張り、人間として同じ旅に生きてくださる。

それが、神の栄光だという。それが、恵みと真理だという。

が、前に見た11節でも、教会はこういうふうに歌っていました。

言は、自分の民のところへ来た、すなわち、「わたしたちの間に宿られた」。

が、民は受け入れなかった。その「民は受け入れなかった」に対応するのが、今日の、わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。というところです。

民は受け入れない。民は神を神として認めない。神を証しすることができない。

ですから、人間となられたロゴスを、十字架にかけたのです。殺したのです。

が、そこに、わたしたちはその栄光、彼の栄光を見た。とうたう。

恵みと真理とに満ちていたとうたう。

「恵みと真理」という言葉は、なぜか旧約聖書に出てくる場合は「慈しみとまこと」と訳されるんですけどけれども、双子のペアのように一緒に用いられる。

「恵み・慈しみ」という言葉は、神が、神の民と共にあるという約束に誠実であられるということをあらわす言葉です。人間の方はすぐに約束を反故にして、神から逃げ出そうとするんですけどけれども、神様の方では約束を守り続ける。民が破れすてたものを張り直すようにしまして、共にあるという約束を大切に続けられる。それが、神は恵み深い、神は慈しみ深いという言葉です。

「真理・まこと」も同じです。神は一度、共に約束なされたことを決して忘れられない、破棄されることもない真実なお方です。忠実なお方です。

その神の「恵みと真理」と、人間に対する「慈しみとまこと」とは、「わたしたちの間に宿られた」ということであらわされたんだと、教会はうたうのです。

神が人となられたということが、十字架の始まりになるんですけどけれども、神の御子の苦しみの始まりになるんですけどけれども、しかし、そこに、「恵みと真理」とはあらわされて、教会は、その神の御苦しみを、神の栄光として見ているとうたう。

神が人間のために苦しまれた、人間の罪を全部かぶるという痛みを受けられた。

それが、神の栄光だなんて、考えてもいなかったんです。

聖書をよく研究していたはずの律法学者も、イエス様から直接、聖書のことを教えてもらっていたはずの弟子たちも十字架の前には、聖霊に満たされる前には、全然、分からなかったんです。

神の栄光というと超然としていて、人間のやることなんかには左右されなくて、海を割り、嵐を吹かせ、大地をひっくり返しという、人間には手出しができないこと、そういうことを神の栄光として考えるじゃないですか。

それも神の栄光としてあらわされることではあるでしょう。

けれども、言が「わたしたちの間に宿られた」ということであらわされた神の栄光は、そういうものとは全く違った。

超然としていない、逆に人間の生活の中に入って行かれた。共に暮らされた。

しかも、その人間は共に生きている人間からも見ないようにされている、無視されている、そういう病を負うもの、貧しい者たちだったんですね。

神はそういうふうに御自身の姿をあらわされる。

これが、神なんですよ、これが神の栄光なんですよ、と示される。

天高くおられて傍観しておられるのではない。

人間の痛みを担う。人間の呻きに耳をそばだてる。

そうして、御自身の栄光というもの、御自身らしさというものをあらわされる。

それは、イエス様が来られて初めて分かったことです。

いや、聖書には書いてあったんですよ。旧約聖書に書いてあったんですよ。

17 節に、**律法はモーセを通して与えられたが**、とうたわれていますように、「律法」という旧約聖書に書いてはあったんですよ。弟子たちも、復活のイエス様に教えられて、“あっ、本当に書いてある”と後から気づく。

やっぱり、海が割れたり、大地が揺れたりという派手な場面が目につきますので、合わせて、やっぱり神様は華々しく御力を奮ってくださるお方でいてほしいという、こちらの願望もあつたりしますので、書いてあるのは書いてあるんですけども、読み飛ばしちゃうんですね。旧約聖書は長いですし。

律法はモーセを通して与えられたが、確かにその通りなんですよけれども、が、神様の栄光がどういうふうにあらわされるのか、それが十字架という或る暗さをもって、或る重さをもってあらわされるものであると分かるのは、イエス様のおかげなんです。

恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。

神の恵みと真理、すなわち、神が共にあるという約束に対しての誠実さ、忠実さ、それはイエス・キリストを通して、言が人となられたイエス・キリストを通してだけ分かるものなんです。逆に言うならば、イエス・キリストを知らずして、イエス・キリストの言葉、イエス・キリストのふるまいを知らずして、神を知ることはできない。神を証することはできない。18 節。いまだかつて、**神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。**

神を知りたいと思うならば、ひとまず神様はこういう方であってほしい、こうであつてもらわなければ困るという自分の願望を横において、むくむくと沸き起こって来る願いを置いて、あるいはこれまでの経験や知識を脇に置いてイエス・キリストがどのように生きられたのか、どのような愛を人間に示されたのか、どのような苦しみを人びとと共に耐え忍ばれたのか、新約聖書に記されたそのお姿を追いかけることです。

わたしたちはその栄光を見たと教会はうたう。その見たという言葉には、じっと見る、注意深く観察するという言葉が使われています。

イエス・キリストのお姿をじっと見るのです。それだけでいい。

神を知るためにそれ以外に見るものはない。

神が人となられたイエス・キリストのお姿に、神がどういうお方であられ、かつ人間はどういうふうになければいけないのか、そのすべてが示されています。

父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。

極めて単純なことなんです。神を知るために、イエス・キリストを知る。

極めて単純なことです。そこから人間の生きるべき方があり方が示される。

深くはある。掘り下げても掘り下げきるということはない深さはある。

けれども、複雑ではない。それでも、難しく考えるのが私たち人間でもある。

コヘレトの言葉が、「神は人間をまっすぐに造られたが人間は複雑な考え方をしたがる」(7章29節) というのは真実です。

そのために、教会は共にうたい続け来たんです。

独りで考えていると複雑な方向にばかり言ってしまいますので。

的外れな方向に行ってしまうので。

共に集まって、イエス・キリストにおいてあらわされた神の栄光だけを見よう。

じっと見ようと。聖霊に複雑な人間の考えを取り払ってもらって、神からの言葉だけに目を注ごうと祈りを合わせてきたのです。

そうして、「わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた」という経験を、礼拝体験を重ねてきたのです。

「恵みの上に、更に恵みを受けた」。それは、恵みと交換して恵みを受けたとも訳せる表現なんです。きょう、私たちは共にこうして礼拝にあずかり、恵みを受ける。

神の祝福を受ける。そうして一週間、歩み。その恵みを汚すような歩みがあるかもしれない。あるいは不信仰な心から恵みがくすんで見えることがあるかもしれない。

けれども、神の恵みは尽きない。「恵みの上に、更に恵みを受けた」。恵みと交換するようにして、また私たちはこの礼拝において神の恵みを受ける。受けることができるのです。一週間の間にて、祝福を手放すことがあっても、忘れることがあっても。

恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。

ですから、安心して一週間歩んで、また次の主日、共に恵みをいただきますよう。

聖霊に満たされて、ただ聖霊に満たされて、恵みの上に恵みをいただきますよう。

ただ、イエス・キリストから、私たちと共にあってくださいの神の言葉から。

お祈りをいたしましょう。

■ 祈り

主は彼の前を通り過ぎて宣言された。「主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち、幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す」出エジプト記34章6、7節

■ 静止の時

『子どもと親のカテキズム』

問25 神(かみ)さまは、このような罪人(つみびと)となった私(わたし)たちを、ほろびるままにお見捨て(みす)てになりましたか。

答 いいえ。神(かみ)さまは、私(わたし)たちをあわれんで、救(すく)い主(ぬし)によってご自分(じぶん)の子(こ)どもに回復(かいふく)しようと、御心(みこころ)のままにあらかじめおさだめになりました。この救(すく)い主(ぬし)によって、神(かみ)さまは私(わたし)たちを罪(つみ)とほろびから救(すく)い出(だ)してくださいます。

このカテキズムにおいて、何より今日の説教の言い方に合わせるならば、イエス・キリストにおいてあらわされた神は、人間をお見捨てにならない方であるということです。

それが、「あわれみ」という言葉であらわされています。

神が憐れみ深いお方です。

その神のお姿が、イエス・キリストにおいてあらわされたのです。

人間と罪から救い、神の子に回復させる。

それが、御自身の御心であられたというのです。

考えてみますと、神が人間を救われるのは、それは人間の側から言いますと、その愛において、その憐れみにおいてなんですけれども、他方、神の側から言いますならば、それは御自身の御心に基づいてということになる。

人間をつくること、人間と共にあること、人間を世の終わりまで守ること。

それを決められたのは、神御自身であられます。

わたしたちがこの地上に生を受け、今日この日、ここに招かれ集められた。

そう決められたのは、神御自身であられます。

ですから、神が責任をとってくださいます。

わたしたちの将来に渡る歩みに、神は責任をとってくださいます。

安心して、おゆだねして歩んでまいりたいと願います。

